



蕉門頭陀物語

涼師遠

全



門 普 4
番 600
卷 173

特



此れより友人何れ一書をよみしところありし味
 らしきところありし机のりやま投じとありしハ
 ありし程の額陀物ありしあり、こゝろ地味
 総角乃こころひきたり、本州越谷ノ人 号ニ吾山下 橋本居ノ人
 しを程むらり、天明七年十二月十七日没 年七十余
号ニ東国舎羅人 吾山門人
 家^{号ニ東国舎羅人}書の本を結あつた、寛政十年八月五日没 年四十
 九の人々ハ廿六日、天明七年十二月十七日没 年七十余
 名をのむらり、天明七年十二月十七日没 年七十余
 乃とせり、天明七年十二月十七日没 年七十余
 元風雅にありし、天明七年十二月十七日没 年七十余
 人、天明七年十二月十七日没 年七十余

月六音

卷之

〇〇〇

月六音

卷之

〇〇〇

予の書を暇に読み乃ち其を不習其書
 ありしかるにその書はわづらひの書なり
 文面もつれづれ補つていふもなす
 の海まは見えたりたれり
 たりたりともあはれぬ侍の佐平次
 此れを合せ考へて申す

享和二年夏月 徳川家 著
 子也 并 抱 齋 黄 漢 一 年

著 笠 隠 居



わづらひの書は葛菴法師風雅を流るるの書
 庵より書きたる書は葛菴乃物徳を傳へ稿
 うの洛の重寶亦附これ小東西のわづらひ徳を
 増さすわづらひの書板をてててのち越れ
 因坊ありて加賀の金城に書きたる書も伊勢あり
 書を流るるの書はわづらひを加へて西南北越の新徳
 を補つて得る書の世説もいふもなす
 ありてはわづらひの書も東氏を海川のわづらひも
 ありてはわづらひの書もわづらひの書もわづらひの書も
 ありてはわづらひの書もわづらひの書もわづらひの書も
 ありてはわづらひの書もわづらひの書もわづらひの書も

...机の...一巻...おのぬか...蕉門改
院物...と題...
あ...
人

寛延元年九月

氏城 吸露庵

建氏名ハ凌仙字ハ孟高寒華齊
号ス北国ノ人京師及江戸ニ住ス画名
高ク初涼節ト書テ俳諧ヲ教ヲヨク
安也大理又綾足ト稱シテ国字ヲ万葉
集ノ古風ヲ唱フ吸露庵ノ号アリ

蕉門頭院物語目録

- 蕉小枝のりやまの宮の并秋風の句法
- 蕉外脚物のりやま蕉此句
- 蕉古人の句評并 縮まの次
- 蕉まよりの文通の巻
- 蕉近江の秋并 路通入門
- 其角 神坂の句を同
- 義仲等の法是其角 侠客の威を振ふ
- 其角 三井寺の巻二章
- 支考 還俗
- 支考 福寿子の巻の記

支考 休亮一又通并乙申の白評

支考 ハ夕暮の才之を案

支考 臺平をこほききき吉野山小登り

支考 乙申の附白を案

惟然坊僧相并許去天物集を題

惟然あまのあま并時雨の歌

方中良の西月おりの歌

支草 吉平支考野水趣人石の會

秋風流の表をうむ并支考と絶交

嵐言の下四章を編

野坡流川

中坡登人におよ

野坡早よの歌

李中堂登原を案

許六麻を病并万子に見也

万子前大見也前少枝子留別

酒寄梅の鐘をあり

鬼也多た迫る并路通

涼鬼変化多あり

涼兔祥世

麦林橋の庵ふり對一月の海橋を懐る
支考 麦林中力を戦ひて

遺漏目次一條

○ 翁尚白人物語并小冊の附句

翁尚白人物語并小冊の附句

蕉門頭陀物語

涼師 述

○ 翁尚白人物語并小冊の附句

加賀金沢 翁尚白人物語并小冊の附句

加賀金沢 翁尚白人物語并小冊の附句

加賀金沢 翁尚白人物語并小冊の附句

加賀金沢 翁尚白人物語并小冊の附句

加賀金沢 翁尚白人物語并小冊の附句

加賀金沢 翁尚白人物語并小冊の附句

加賀金沢 翁尚白人物語并小冊の附句

加賀金沢 翁尚白人物語并小冊の附句

加賀金沢 翁尚白人物語并小冊の附句

加賀金沢 翁尚白人物語并小冊の附句

たりさあやこの春の風らあめむ夕の情をまゝあ
くとも日をばもわかしくも入果しく風ほらうらも肌よあ
こふ旅人の姿わらうらんやりにあえあ風といふ
ゆゑ人あつらんやあさささささささささささささ
あささささの舞はるるささささささささささささ
さささささの文あさささささ

○ 旅の荷物うらあささささ

あささささ物うらあささささささささささささ
ささささささささささささささささささささ
の口をうらあささささささささささささ
あささささささささささささささささささ
あささささささささささささささささささ

軽くけつあ時あささささささささささささ
川あささささささささささささささささ
つあさささささささささささささささ
ひあさささささささささささささささ
あさささささささささささささささ
さささささささささささささささ
ささささささささささささささ
さささささささささささささ
ささささささささささささ
さささささささささささ
さささささささささ
さささささささ
さささささ
さささ
ささ
さ

くさのゆけさる富うけらうや 藤の花
かたよりのうらみさる物さう 二つはばはこれ
のけし 藤の葉ふかといふは

○翁古人の句評并編妻の次

花のそと見えしはさうけて 花のゆるやれさるは
うらみおさうらふちさうらふちさうらふちさうらふち
らる夕られうらみさうらふちさうらふちさうらふち
みさうらふちさうらふちさうらふちさうらふちさうらふち
らうけさるやの入あさうらふちさうらふちさうらふち
あさうらふちさうらふちさうらふちさうらふちさうらふち
今さうらふちさうらふち

いれはちや園れうらひと佐のや

○翁去来か文通の巻

去来ハ嵯峨二任シテ落柿舎ト云ヌ
白井玄勝カ季子院家ノ産ナリ俗柿
平二郎室永政元九月没ス

又あさうらふちさうらふちさうらふちさうらふち
あさうらふちさうらふちさうらふちさうらふちさうらふち
またけりさうらふちさうらふちさうらふちさうらふち
孫と御終さうらふちさうらふちさうらふちさうらふち
あさうらふちさうらふちさうらふちさうらふちさうらふち

○山里を萬歳おそし梅の花

白井氏秘書
八十一卷ノ頁一十一
あさうらふちさうらふちさうらふちさうらふちさうらふち

あさうらふちさうらふちさうらふちさうらふちさうらふち
あさうらふちさうらふちさうらふちさうらふちさうらふち
あさうらふちさうらふちさうらふちさうらふちさうらふち
あさうらふちさうらふちさうらふちさうらふちさうらふち

小室本とのこのきりつらぬらんかまゆわゆる人若い
庭よりそのまゝにたうりてまの山よりふまをさうり
を通りてあゆみあせりの斬り着板をわけてさうら
の妙業ありと託を付てさうらをわらうりてさうらんの
業たうりてあせり笑ひ業をさうらつてまの山よりさうらんの
実ゆり人ともいふ

○ 扇近江新脚并流通入門

扇近江せ業洋や山をさうらた庭より斬りてさうら
るまうりて白きを食はれ字枕清りてまの山よりさうらんの
けやうりてまの山の業流のいさあかたうりて此の皮板入
りて扇より通しなる一紙ありてさうらぬやあせりて

まをさうらぬやあせりて此の皮板入りて扇より通しなる一紙ありてさうらぬやあせりて

○ 扇近江新脚并流通入門

扇近江せ業洋や山をさうらた庭より斬りてさうら
るまうりて白きを食はれ字枕清りてまの山よりさうらんの
けやうりてまの山の業流のいさあかたうりて此の皮板入
りて扇より通しなる一紙ありてさうらぬやあせりて

ちがひく君の財を費らぬと、劔のひら眼をさした親の
 くを費れども、松原の袖を乞と、入れたの袖を乞われと
 只り、おれの柳を乞と、御の心やうと、さるる夢のう
 鴉の糞を乞と、あつと、そのを、あつと、花のたのむ心
 八珍の舌おちり、血の皮の喉を乞と、心く、朝夕を味
 祥のほろろ、流坊も乞と、さるる乞と、白キ歯を乞と、
 して、紫の糸、紫の糸、さるる乞と、この版のいと、白く
 俵を乞と、さるる乞と、人の食を乞と、さるる乞と、亦乞
 食したと、さるる乞と、袴を乞と、さるる乞と、夜の方を乞と、
 も、えちつと、さるる乞と、さるる乞と、この巻の、相因く
 かけ、さるる乞と、只元を乞と、さるる乞と、さるる乞と、
 只元を乞と、さるる乞と、さるる乞と、さるる乞と、

と、儂な乞と、さるる乞と、迷悟の二巻、さるる乞と、
 おちと、さるる乞と、紫の糸を、紫の糸を、さるる乞と、
 小袖よ、この乞、廓れ、髪を、風雅よ、乞と、老の杖を、
 けり、さるる乞と、樂又、その中よ、あつと、さるる乞と、
 むのか、その乞、さるる乞と、流坊も、乞と、さるる乞と、
 今よ、首を、叩と、日、海、この版、五巻を、乞と、咽、
 を、乞と、さるる乞と、寧ろ、さるる乞と、さるる乞と、
 中よ、梅、さるる乞と、けり、さるる乞と、流坊、の、
 さも、あれ、さるる乞と、梅、お、この、さるる乞と、
 流坊、第、の、ひら、と、さるる乞と、矢、立、を、乞と、
 乞と、さるる乞と、
 老、病、さるる乞と、さるる乞と、
 流坊、第、の、ひら、と、さるる乞と、
 乞と、さるる乞と、

も草の枕をすし、前勤へて云、これ伊賀上野

北村氏後江戸二百七テ野守所上九貞徳徳持ノ門人ナリ

洛の亭子、枕をすし、此の亭子の亭子は、今

北村氏後江戸二百七テ野守所上九貞徳徳持ノ門人ナリ

と、此の亭子の亭子は、今

名をよす、此の亭子の亭子は、今

名をよす、此の亭子の亭子は、今

名をよす、此の亭子の亭子は、今

名をよす、此の亭子の亭子は、今

名をよす、此の亭子の亭子は、今

名をよす、此の亭子の亭子は、今

名をよす、此の亭子の亭子は、今

名をよす、此の亭子の亭子は、今

名をよす、此の亭子の亭子は、今

名をよす、此の亭子の亭子は、今

名をよす、此の亭子の亭子は、今

名をよす、此の亭子の亭子は、今

名をよす、此の亭子の亭子は、今

名をよす、此の亭子の亭子は、今

名をよす、此の亭子の亭子は、今

名をよす、此の亭子の亭子は、今

名をよす、此の亭子の亭子は、今

名をよす、此の亭子の亭子は、今

名をよす、此の亭子の亭子は、今

名をよす、此の亭子の亭子は、今

名をよす、此の亭子の亭子は、今

名をよす、此の亭子の亭子は、今

名をよす、此の亭子の亭子は、今

尚白子おつああり、江州大津人

正秀會の席、江州膳所人

坂、江州膳所人

小所の、江州膳所人

後撰集の、江州膳所人

と、江州膳所人

乃、江州膳所人

と、江州膳所人

其角野、江州膳所人

炭、江州膳所人

名、江州膳所人

と、江州膳所人

と、江州膳所人

と、江州膳所人

と、江州膳所人

と、江州膳所人

と、江州膳所人

と、江州膳所人

と、江州膳所人

「枯尾花集二ノハシ」
「元禄七年十月十八日」
「江外粟俸」

其角翁の跡を免台「藤所ノ人乙別リ母」初七日の法甚、弟仲幸子、聚會して、存
の智月「藤所ノ人乙別リ母」なまけ行ある、尼あり、法通か、其書を好く、思つて、弟
馬らり、其氏いあり、と云々を一つ、と云々の一、といひ、これ
い人、法通を誅せ、これの席を升る、とあり、その、寺の、友
居の趣、と云々、智月乙別を、と云々、車中を、と云々、其角翁
け、と云々、法通、カ、罪、と云々、と云々、この、然、い、何、も、と云々、
碑、前、の、焼、香、と云々、と云々、と云々、と云々、と云々、と云々、
さ、何、と云々、法通、智月、カ、後、と云々、の、何、と云々、と云々、と云々、と云々、
會、是、の、後、甲、將、人、い、つ、れ、も、咄、ゆ、と云々、と云々、と云々、法通、慎、を、お
と、つ、つ、と云々、大、津、の、使、客、を、と云々、と云々、この、席、を、和、さん、と云々、
其、角、文、意、を、躍、越、と云々、十、徳、の、袖、と云々、と云々、と云々、と云々、と云々、
「あ、け、」

を「お、れ、」會、と云々、使、客、を、立、あ、り、と云々、又、考、文、草、紙、と云々、と云々、と云々、酒、堂、に
秀、使、客、を、防、く、其、角、奉、明、「胸、カ」と云々、と云々、と云々、と云々、
吾、湖、中、の、人、と云々、と云々、と云々、と云々、と云々、と云々、
城、は、日、本、橋、あり、日、本、の、人、の、橋、を、と云々、と云々、と云々、と云々、
橋、を、と云々、と云々、の、其、角、カ、名、を、と云々、と云々、と云々、と云々、
大、津、登、れ、屋、元、と云々、と云々、と云々、牛、の、法、は、命、を、つ、れ、
と云々、と云々、此、昔、此、と云々、一、厨、は、芽、を、と云々、と云々、二、星、治、良、ハ、是
を、催、給、よ、あ、そ、れ、と云々、と云々、刺、の、り、あ、と云々、と云々、と云々、と云々、
去、つ、と云々、い、お、な、と云々、と云々、と云々、と云々、と云々、と云々、
使、客、晚、の、と云々、と云々、と云々、と云々、と云々、と云々、と云々、
其、角、三、井、寺、不、登、る、二、章

滑稽傳三珍碩
江右三來リテ深
川集ヲ撰ヌ
招スルニ元禄五
年酒堂江右ニ
来リテ深川集
成ル其緒云々
壬申九月江戸
下リ赴年一
ハ三年キミ
ツノアハ格不
ヤ〜〜風俗
を〜酒堂
とあり〜列子
珍碩の号アリ
これ酒堂ハ号
珍碩ハ別号カ
又滑稽傳子云
大坂珍碩を助テ
元禄七年百十
百ノ制を〜
新風の疏有
近也云々
これ〜
三年酒堂ハ大坂
ニ住スルコト明レ
シカニ正秀酒堂
カギニアソコアルハ不〇番曲翠ヲ酒堂(甲)五(ニ)ヤ
但レ写レヤコリレニヤナホ考ベレ又滑稽傳ニ云膳所曲翠奉
正秀珍碩ホヲニ引テヒカゴノ俳諧アリヒロコハ元禄三年ノ撰

法筵車後り〜
正秀酒堂江州膳所人珍碩ヒロコノ人カ
洋の人〜
夕方の〜
〜
この寺の晩鐘〜
〜
遠く〜
の〜山門に到る
か〜
あ〜
お〜
ふ〜
あ〜

ナリココロモテハ酒堂オホ膳所ニアリシナルベシ

此二章世〜
明の正秀亭の會〜
々々の巻〜
伸〜
か目〜

○支考 遺俗
支考ハ尾州大山ノ人美濃ニ住ス獅子菴東花田花
見龍城式ホノ号アリ蓮ニヲ支考カ晩号用ケフ

支考人〜
工夫〜
秀〜
許〜
乃〜

ありしや、後ち々復力を闘て隔るるは、老師の存し
夜鐘をこゝろ、去る還俗して遊ばせり。

蓮のちあし小便をせしむるお告利本 支考
と因果獲江の吟を跡を

支考福壽草の花を觀す

ある年の暮、福壽草をまきく左あしをせし、この花をえ
ふり、先一輪光をそれらして、後志る先ハ、此の草は
此の次又盛をうつて、支考つて、親想つて、
人間の子孫このて、この風流も、此のて、これハ
筆劃の色をわく、このあつて、枝のあつて、
支考つて、此のて、此のて、此のて、此のて、

文章を傳ふて、此のて、此のて、此のて、此のて、
門人の變解、師道をわらわら、此のて、此のて、
も又書あつて、注をわらわら、解を加へ、二世の變化を
そとんと、此のて、此のて、此のて、此のて、

支考水亮加賀金沢人文通并乙申の句評

支考金城の非、文通せる、此のて、此のて、
家おつて、東西二流の風流を、此のて、
甲申のて、此のて、此のて、此のて、
此のて、此のて、此のて、此のて、
か、此のて、此のて、此のて、此のて、
や、此のて、此のて、此のて、此のて、

とちしよなかののしつと五巻も同じ及ゆのとよ
風雅とあやまきわれしつ次第に理屈を脱し編
やあやまきあるは一向ゆかひのけしよん是る合
そらりいせうちやあやまきとあやまき

○ 支考ハ夕言の才ニを業

支考ハ夕言此集を撰むふいけくも秋のそふ
撰也といふは夕言才ニを業入只月といふは夕
中一やと夕言あやまき夕言倚一食をそら席
はあやまきうらまきと夕言

細いあやまきおの月の子滑

志をくこの夕言解程一玉を撰くよの如し亦

四夕月といふ夕言入るる夕言の夜も師とあやまき夕言

水を一桶汲るるありて

凡夕言を業も夕言といふ夕言は夕言を撰む
ハ夕言の工業も入るる夕言を業も夕言を撰む
夕言を撰む夕言を撰む夕言を撰む夕言を撰む

○ 支考 支考 支考 支考 支考

支考 支考 支考 支考 支考 支考 支考 支考
支考 支考 支考 支考 支考 支考 支考 支考
支考 支考 支考 支考 支考 支考 支考 支考

支考 支考 支考 支考 支考 支考 支考 支考
支考 支考 支考 支考 支考 支考 支考 支考
支考 支考 支考 支考 支考 支考 支考 支考

小天下將之の旨をくさる人美濃人 其の場子ありしか
 人の信を起さしこころと 童平美濃人 中出りたるハこころ
 の智のねり 乃さ 察りよありけし山をせむかぬ其
 立とお付ん大和路の行旅せん 吾子もつらんや
 ころあよ 童平もあはれし同い ちよとせむかぬの事
 うこころゆ 葉よささの力をすちりけし 杖コノ同脱文十九をせむかぬ
 ちりよあはれしこころ 横くを智のこころ 一月千午の
 ちりよあはれしこころ 吉水院の登りて 南帝は昔
 くらきあはれし 古戦の迹の流をせむかぬ ちりよあはれし
 ちりよあはれし ちりよあはれし ちりよあはれし 童平
 童平立ちたる石をせむかぬ ちりよあはれし ちりよあはれし

あつて人をせむかぬ 花のいろを 仰ぐ人ときん也 時よ
 支考取を何んぞ 彼白をたつる ちりよあはれし ちりよあはれし
 天下の絶望をせむかぬ ちりよあはれし ちりよあはれし 童平
 眉をせむかぬ ちりよあはれし ちりよあはれし ちりよあはれし
 流しと行旅の叔とをせむかぬ ちりよあはれし ちりよあはれし
 ちりよあはれし ちりよあはれし ちりよあはれし ちりよあはれし
 童平の脊中をせむかぬ ちりよあはれし ちりよあはれし ちりよあはれし
 口を掩く 山をせむかぬ

支考乙 此の附白を大集

園友を解「後三涼院」 ちりよあはれし ちりよあはれし ちりよあはれし
「後三涼院」 ちりよあはれし ちりよあはれし ちりよあはれし
「後三涼院」 ちりよあはれし ちりよあはれし ちりよあはれし

月人 行録 卷之 〇十

老僧の息を併師のつせりて
 とらふのつこのつるやと
 したまふ親老のつ合あつて
 多積をどし度あつて
 るりしは

ぬらふとつて
 とらふのつこのつるやと
 とらふのつこのつるやと

を併のつを併

と所より
 白名
 んせ

たのま

初号素牛

惟然坊僧相并許去天将集を題す

惟然坊僧相

并許去天将集を題す

のつを併つて
 つるやと
 したまふ親老のつ合あつて
 多積をどし度あつて

水
 あり
 ち
 五
 志

おれとある形をさしつゝ梅月いふ果はく梅
をかきしよ年あつていふいふいふいふいふいふ
ありはむつりうらまゝいふいふいふいふいふ
あまも色をばむあつていふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

おれとある形をさしつゝ梅月いふ果はく梅

とほりつゝ梅月いふ果はく梅
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

僧丈州八元
尾州大山二征
へて勇徳ノ士
カシヨカ其第ニ
家ヲユウシトテ
ヒツカニ居テ前
ヲレニシテ道ノ
修ニ警ルレト
テ墨原ノ神ニ
カヘ江州カ田
ニ住ス
元禄十六年二
月四日卒ス
傳凡俗文選ニ
ハリス

おれとある形をさしつゝ梅月いふ果はく梅
をかきしよ年あつていふいふいふいふいふ
ありはむつりうらまゝいふいふいふいふいふ
あまも色をばむあつていふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

丈草志来支考野水越人石山子會ス

史邦云秀々々々々々々々々々

史邦云秀々々々々々々々々々

野城屋

中州の事... 西國の僧侶... 西國の僧侶... 西國の僧侶...

○ 中州の僧人... 并獲句

ある夜... 中州の僧人... 中州の僧人... 中州の僧人... 中州の僧人...

一行は... 中州の僧人... 中州の僧人... 中州の僧人... 中州の僧人...

中州の僧人... 中州の僧人... 中州の僧人... 中州の僧人... 中州の僧人...

中州の僧人... 中州の僧人... 中州の僧人... 中州の僧人... 中州の僧人...

中州の僧人... 中州の僧人... 中州の僧人... 中州の僧人... 中州の僧人...

ハとまひに刑せりハ火まつん水もたぬる昔も
 遊まりけりやの何事も白くならん我々も
 心も中絶めと苦味を思ふを風人ともふくやれ
 りてこそまをりてそれとありのまゝ白く飛ぶも
 盗人の中前こ思ひももさぬわあうと
 頂くも蒼たうもあゝ雪の迹

○ 野波子考の心をさす

中絶ぬる世の初考の心

ほの〜鳥〜つら〜や窓のま

この世の心あり〜い〜まはほまれと〜あぬ

○ 李由笠塚を筑

李由ハ江州蒲田寺僧ト号シ
 梅亭ト号ス友ト善シ元禄六年冬卒

再考
 許六カ翁二見ハ
 元禄五年五ハシ
 僧誓修云再後
 江戸ニ又リ深川
 芭蕉菴ニ再結フ
 許六ノ時二見エ
 珍碩江ノ末リテ
 深川集ハ俳諧ヲ
 撰メ云云
 珍碩カ江戸ニ来リ
 元禄五年九月ナリ
 コレヲモテレハ

「海照寺十四世僧梅亭ハ桃香ヲ師トス字ヲ留年トイハリ
 李由と許六とあつ〜あ〜道行旅のた〜も

たり梅庵の風流及笠塚の世福とら〜のま〜
 い〜やれの笠ハ李由のハ子也〜核笠子核の心

許六の願を病并〜子見也
 「江州蒲田寺僧梅亭ハ五外号五老并ハ又号菊翁ハ画ヲ善ス正徳五年八月廿六日没ス
 許六ハ其妹芭蕉菴を子トシ芭蕉翁の奥女也」
 「貞享末カ元禄ノ初ナリ」
 「風俗文選」
 「風俗文選」

あ〜る〜人子面せ〜た〜面〜風雅を回〜

金翠の可子馬を遊〜許六子得せん〜を教〜

少乃ふ可子い〜る〜屏風を讀〜ん〜や〜〜蕭々〜
 江〜え〜〜毒〜は〜〜眉〜た〜〜屋〜々〜

この不其前が
玉の鑑あり

門人古服孝の辞をききて、百年後の那洛を端とて、
の未だ記し、さうしてこの梅の時を待て、
を全せ、梅は白ひ梅はあけ、
のうんと、
かろふ、
ア、
日月たつ、
好南は天福の大子のうけ、
うれ篇も、

鬼貫多子、并洛通事

將成の濁り、
鬼貫ハ伊丹ノ人、
後大坂ニ住ス、
本姓ハ上嶋氏、
後平泉氏トス

榎花翁ハノ教早アリ、
維舟及宗因ニ奉ヒ、
後一家ヲナス、
元文三年八月二日没ス、
年七十八、
伊丹墨原寺ニ墓アリ、
鬼つ、
枕言、
とら、
著述、
世世、
林セ

享和壬戌の秋
予大坂不其
一日の地の友
人小鬼を
を同、
云大坂、
つ、
小鬼の療信、
足より、
上、
今、
又云、
本、
を、
辞、
く、
と、
ま、
これ、
つ、
と、

「鬼つ、梅、
落、
母、
吹、
錫、
水、
一、
一、
一、
あ、

珊瑚珠のりくを

見難

門つゝ透る鏡の隠病

乙巳

いづれもあはれ息をつたふ好む見難口を
見難波の麦林乃る見難附の麦林乃る
筆をを加へてゆりしとて

蕉門頭陀物語 年

二のふかたなる月夜の

しやれ笑ふ

うらみ

わらわ

る

コトニ書ハセ見難忠君騰字本下

人下録

卷之

